
ピンクハウスでもいい

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ピンクハウスでもいい

【Nコード】

N1587D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

物理の先生松浦冴子。美人でとても厳しい先生だければれてしまったその趣味は。アンバランスな可愛さを書いてみたくて書きました。

ピンクハウスでもいい

第一章

ピンクハウスでもいい

松浦冴子は高校で物理の先生をしている。背が高くモデルのようなスタイルでいつも整った顔を険しくさせている。まるで女優の様に綺麗な顔であるがそのせいであまり好感の持てる顔ではなくなってしまうているのだ。

しかもその身体をいつも地味で露出のない服で覆っている。何もかもに色気も可愛げもない先生だった。

「ちよつとねえ」

「なあ」

皆それが残念だった。厳しいが真面目な性格だったので生徒からは悪い評判はなかった。いい先生だと言われている。だからこそ言われるのだ。

「あんまり愛想がないから」

「そう、それ」

皆が言いたいのはそのこであった。

「そんなの全然ないし」

「ないっていうかあれよ」

ここで女の子達が言うのだった。

「そういうのから背を向けているわよね」

「あんな地味な服ばかりで」

シックと言えば聞こえはいいが黒だのグレーだの地味な色彩のロングスカートやズボンばかりだ。間違ってもタイトミニやガーターなどはない。上の方も胸は全く見えずその豊かな胸が完全に服という鎧によって覆われていたのだ。

「何が楽しいのやら」

「やっぱり女の子はあれよ」

年頃の娘が言う言葉は決まっていた。

ピンクハウスでもいい

「派手で」

「そうそう」

皆笑顔で言い合う。

「脚も胸も見せないかね」

「面白くないわよ」

「わかってるじゃねえか」

男達がそれを聞いて大いに頷く。やましいところのある顔で。

「やっぱり露出だよ」

「なあ」

「こらっ」

だが女の子達はそんな彼等を叱るのだった。軽く。

「あんた達に見せるんじゃないわよ」

「見たいのならお金払いなさい」

「つてお金取るのかよ」

「そんなに高いのかよ」

「女の肌はそれだけ価値があるの」

女にだけ許される言葉であった。とりわけ若ければ尚更だ。肌の威力はまさに魔力だ。もつとも松浦先生にはそんなものは全く無縁であったが。

「わかつてるの？」

「だからよ」

「じゃあ心の中で払うよ」

「はい、一万円」

男達も負けてはいない。かなり強かに言い返す。

「心の中で払ったぜ」

「これでいいか？」

「心の中で払うのなら二万円よ」

「三万円でもいいわよ」

そう言うともた言い返す。まるでテニスの様なやり取りになる。
「払うのならまけてあげるわ」

「いや、いいから」

「じゃあ心の中で三万円」

「俺は五万」

「まあいいわ」

五万と言われると流石に悪い気はしない。

「それじゃあ五万でね」

「心の中で受け取ったわ」

「どうもどうも」

男達は笑顔で返す。そんな話をしている中クラスの中の一人の女の子がファッション雑誌を見ながら友達とあれこれ話をしていたのであった。

「ねえ、これだけねど」

雑誌にある服を一つ指差して問う。

「どう思うかしら」

「これはまた」

友達は彼女が指差した服を見て困った声をあげるのだった。

「きてるわね、本当に」

「きてるって？」

「きてるじゃない」

友達はそう答えるのだった。

「それもかなり」

「そうかしら」

「そうよ」

念を押すように言うのだった。

「まるで兵器よ」

「何処が？綺麗じゃない」

しかしその女の子後藤千佳はその言葉に首を傾げるのだった。

「フリフリヒラヒラで」

「それが駄目なの」

そう千佳に告げる。小柄で大きな黒い丸い目をした童顔の少女を。

髪は染めもしないブラウンでストレートに伸ばしている。高校生と
いうよりは中学生に見える感じだった。スタイルもそうである。

「ピンクハウスなんて」

「ピンクハウスがいいんじゃない」

しかし千佳はそう友達に言葉を返す。

「そのフリフリヒラヒラが」

「まあそれは好みだけれど」

これは認めた。友人として。

「けれど。それにしてもこれは酷いでしょ」

「そう？」

カタログの服を実際に指差されても千佳は平気であった。

第二章

「それがいいんじゃない」

「またこれ凶悪よ」

友達は平気なままの千佳に対して告げた。

「ライトブルーを下地に」

「ピンクハウスの基本ね」

「ピンクに白に。おまけに装飾まで」

「極めてるじゃない」

完全に趣味が食い違っていた。ある意味ピンクハウスというのはパンクやゴスロリと同じく完全に趣味の世界である。合わない人間にはとことんまで合わないものなのだ。

「だからいいのよ」

「じゃあこれ買うの?」

「うん」

千佳はにこりと笑って答えた。

「丁度駅前で売ってるし」

「ああ、あの店ね」

学校の最寄り駅のすぐ側にあるピンクハウス専門店だ。はっきり言ってそこだけかなり異様な世界にもなっている。やはりピンクハウスは一つの世界だった。

「またあそこなの」

「ええ、お金あるし」

千佳はにこにこことして述べる。

「買うわ」

「やっぱり買うの」

「買わないでどうするのよ」

こつ言い返す。

「そうでしょ? 折角お金あるし見つけたんだし」

「条件は揃ってるわね」

何かを買う為の。さすれば買う。これは最早当然の流れであった。

「それで、なのね」

「そう、それで」

笑顔で言葉を返す。

「いいでしょ、由美子を買うわけじゃないんだし」

「まあね」

その友達由美子は千佳の言葉に応える。言われてみればその通りなのだ。正論で反論することもする気も起こらない程だ。だから由美子としても言わなかったのだ。

「これ似合うかしら、本当に」

「似合うと思うわよ」

由美子は今度は素直に述べた。最初から素直に言っていたが今度はいいい意味で素直だった。つまり褒めるのに素直であったのだ。

「千佳には」

「有り難う。やっぱり私ピンクハウスと違って似合うのよね」

「ええ」

千佳のその言葉にこくりと頷く。

「それも保障するわ」

「有り難う。じゃあ今日の放課後行くわ」

「それにしてもねえ」

ここで由美子は困ったような苦笑いを浮かべるのだった。

「服とかそういうのはどうも」

「好みだからいいじゃない」

千佳はそう由美子に言い返す。

「由美子だってハイソックスに凝ってるでしょ」

「まあね」

実際に今もハイソックスだ。黒いハイソックスでその綺麗な脚を際立たせている形になっている。制服なのでそれがさらに目立っていた。

「確かに」

「同じことよ。それじゃあ」

「まあ楽しんできて」

由美子は最後に千佳に対してこう告げた。

「買い物かね」

「ええ」

千佳は笑顔で頷く。こうして買い物に行くことが決定したのだ。た。

放課後実際に買い物に行く。当然目当てはそのピンクハウスの服である。

店まで大急ぎで行く。外見もかなり派手で可愛らしい。この可愛らしさが逆にけばけしいという意見もある。やはりピンクハウスは好みが別れる。

店の中もだ。そのお伽話の様な服やアクセサリーで溢れ返っている。千佳はその中を進み店員さんにあの雑誌を広げて言うのだった。「この服下さい」

ページに付箋までしている。あの服のページだ。服の写真にはもう赤マルまでしている。その赤丸を指差してカウンターにいる店員さんに対して言ったのである。

「その服ですか」

「はい」

千佳は店員さんの言葉にこくりと頷いた。

「ありがとうございます」

「すみません」

ところが返って来たのは残念な返事だった。

「申し訳ありませんが今さっき」

「売れたんですか」

「そうなんです」

店員さんは申し訳なさそうな顔と声で述べる。

「それで。その」

ピンクハウスでもいい

「ああ、ないんですね」

もう言わずもがなだった。千佳はそこまで聞いて急激に落胆しきつた顔になるのであった。それはもう奈落の底に落ちたかのようであつた。

第三章

「じゃあいいです」

「まあまあお客様」

ここで店員さんはフロアに入る。善意と計算の両方がそこにある。なおこの店員さんは善意が七で計算が三であった。いい人と言っているのか。

「そう仰らずに。御気を落とされずにですね」

「ええ」

「これなぞ如何でしょうか」

その善意と計算のもとに別の服を提案してきたのだ。

「これって？」

「はい、これです」

その売れた服と同じページにある服を指差してきたのだ。

「この服は如何でしょう」

「あつ、これですか」

実は千佳もその服に目をつけていたのだ。だが考えた末にその売れた服にしたのである。そうした経緯がある為その服もまたお気に入りだったのだ。千佳も店員さんも見る目があると言えた。

「如何でしょうか」

「いいですね」

千佳は明るい声で応える。

「じゃあこれで」

「はい、それでは」

こうして千佳は本命の服は買い損ねたが次点の服を買うことができた。このことで機嫌はまあ保たれた。それで早速家に帰ってまずは服を片付けて次の休みに着て遊びに行くことにしたのだった。

「残念だったわね」

次の日由美子にそのことを話した。すると由美子はこう言葉を返

してきた。

「それはまた」

「うん。けれど別の服が買えたし」

「それでよしなのね」

「そういうこと」

日に焼けていささかボーイッシュな由美子に対して言う。由美子の髪型は千佳のそれに似て長いが色ははっきりとした黒である。ボーイッシュな顔立ちにロングヘアは微妙なアンバランスと可愛さを醸し出していた。

「よくあることだし」

「何か買わされたって気もするけれど」

由美子は右手で頬杖をつき少し目を細めさせて言うのだった。

「まあそれもよしね」

「いい服買えたし」

千佳はそれで満足であるようだった。

「それでね、今度の土曜日」

「何処か行くの？」

「買い物行こうかなって思ってるの」

機嫌のよさを全開にしての言葉だった。

「どうかしら」

「悪くないんじゃない？」

由美子は頬杖をついたままクールな声で述べてきた。

「お金があれば」

「まだ少しあるの。じゃあいいわよね」

「買い物行くの私じゃないしね」

「一緒に来てくれないの」

「御免なさい」

何故か謝ったところで急に顔がにこりとしていた。

「私その日は」

「ああ、あれね」

千佳は由美子のその顔と声で事情を察した。
「デートね」

「ふふふ、そうなのよ」

心から楽しみな顔になっている由美子であった。

「いいわよ。彼氏優しいし」

「隣のクラスの御木本君だったわよね」

「ええ。千佳も彼氏作ったら？やっぱり違うわよ」

「私も。そうね」

由美子のその言葉にふと考える顔になる。

「いいかしら。相手がいればだけれど」

「そんなのは作るものよ」

由美子はきつぱりと言った。

「自分でね」

「そうなの」

「そうよ。いい？」

由美子はここで己の恋愛感を言うのだもった。

「まず押す」

「押す？」

「そう。そして次に押す」

かなり強引な恋愛感であるらしい。

「また押してその次も押して」

「最後は？」

「そこも押すの。いいわね」

「全部押すんだ」

「そういうこと」

強い声で答えた。

「押して押して押しまくらないと駄目よ、ああいうのは」

「止まらないんだ」

「ええ、とまるわ」

ここで由美子は不意に言うのだった。

「ただ、とまるのは」

「止まるのは？」

「相手の家よ。それも強引にね」

「えっ、じゃあ」

「そうよ、泊まるの」

言葉の意味が違っていた。由美子は話をしてそれを理解したのだ。つた。

「ストップしたらそれで終わりだから」

「そうなんだ」

「そうよ。そしてそこでも押すのよ」

高校生から逸脱した言葉になっていた。だがそれでも由美子は己の主張を変えないのだった。やはり強引な彼女であった。

「もっと細かく言えば迫る」

「迫る……」

「そう、迫るの」

また言うのだった。

「相手が戸惑えばさらにね。わかったわね」

「何か凄いのね」

「好きになつたら当然でしょ」

由美子は当然のように述べた。

第四章

「だって。そうでもしないと男って」

「駄目なんだ」

「そういうこと」

にこりと笑って述べる。

「千佳もそういうところ。頑張りなさいよ」

「私は何か」

少し首を捻ってから言葉を返す千佳であった。

「そこまでは」

「無理？」

「服だってそうだし」

そのピンクハウスについても言う。

「なかったらね。別のを買えばそれで満足するし」

「そうよね、あんたって」

「うん。そういうタイプ」

「服はそれでいいけれどね。それにしても」

由美子は服に話を移してきた。

「あの服は残念だったわね」

「そうね。けれど別の服買ったし」

それで満足だというのだ。やはりそこが千佳であった。

「それはそれで」

「それでもあれね」

由美子は楽しそうに笑ってまた千佳に告げた。

「どんな人が服を買ったか気にならない？」

「あつ、それはあるわ」

その言葉にこくりと頷く。

「やっぱり。誰が買ったのかなって」

「ひょっとしたらその人と会うかもね」

また楽しそうに言う由美子だった。

「ばったりと」

「そうかも。それはそれで面白そう」

「ひよっとしたら」

楽しげに笑いながら言葉を続ける。

「松浦先生かも」

「いや、それはないでしょ」

千佳は笑ってそれは否定した。

「似合わないわよ。それに」

「それに？」

「先生ピンクハウスって感じじゃないじゃない」

「それはそうだけれど」

それでもだと。あえて大胆な仮定をしてみせるのだった。

「ひよっとしたらってことがあるじゃない」

「それじゃあ」

「可能性はゼロじゃないわよ」

頭の中ではゼロと想っていても言う。

「だからひよっとしたら」

「若しそうだったらびっくりよ」

見れば千佳も有り得ないといった顔であった。

「そんなのって」

「試しに今度のお休みお店にも言ってみたら？」

「ピンクハウスに？」

「ええ。どうかしら」

「そうね」

千佳は少しだけ考えてから由美子に答えた。

「どちらにしるあの辺りに行くし」

「じゃあ丁度いいじゃない」

「そうね。それじゃあ」

「どっちにしるハンカチとか買うのよね」

由美子はそれについても言ってきた。

「丁度いいじゃない、本当に」

「まさか会えるとは思わないけれど」

ここで言うのは服を買ったその人だった。決して先生ではない。

やはりそれは思いもしないことであつた。この場合は二人共である。

「行つてみるわ」

「そういうこと。それじゃあ」

ちらりと時計を見る。

「いい時間ね。席に戻るわ」

「ええ」

授業がはじまる時間だつた。由美子は自分の席に戻りそうして真面目に授業を受けるのだった。だが今の話で千佳はまた店に行くことになつたのだった。

すぐにその休みになつた。千佳はあの買った服を着てピンクハウスに向かう。やたらと少女趣味の服装になっているがそれが実に気持ちよかつた。

「さて、と」

千佳は次第に見えてきた商店街のピンクハウスを見て呟く。

「ハンカチと。あとは」

何を買おうか考えていた。その時はあの服を買った人が誰なのかは考えてはいなかつた。

「アクセサリーを見てね。そんなところね」

そんなことを考えていた。そうして丁度考え終わった辺りで店の前に来た。その時であつた。

「有り難うございました」

「はい」

店から誰から出て来た。その人は。

「えっ!?!」

千佳はその人を見て思わず息を呑んでしまったのだった。

「えっ!?!」

向こうも気付いた。千佳の声で。

「どうして」

「それはこっちの台詞です」

千佳は啞然としたまま述べる。

「どうしてここに」

「そんなこと言われても」

そこにいたのは何と松浦先生であった。その長身にあの服を着ている。似合う似合わない以前にどうしてここにいるのかという謎すらあった。

「と、とにかく」

先生は苦し紛れの感じで言葉を出してきた。

「ここじゃ何だから。そうね」

「どうされるんですか？」

「場所を変えましょう」

「こう提案してきた。」

「お店の前でお話しても他の人やお店の迷惑になるわよね」

「え、ええ」

千佳も先生に言われてそれに気付いた。そういえばそうであった。

「ですね。それじゃあ」

「下手なところでお話しても」

それでまた他の誰かに見つかってしまおうと考えたのだろうか。いつもはクール過ぎるまでにクールな先生の顔が今では狼狽しきったものになっていた。

「あれだから。そうね」

「ここで裏手を見た。」

「あっちに行きましょう」

「あっちですか」

「そう、あっち」

裏手を指し示して言う。

「そこに喫茶店があるのよ。そこで話しましょう」

ピンクハウスでもいい

「わかりました。それじゃあ」
「ええ」

こうして二人は一先裏手の喫茶店に入ることになった。そこは千佳の知らない店だった。見れば大正のようなシックな趣きの店であり木造が目立つ。ダークブラウンの店によく似合うコーヒーの香りが支配していた。その中の木のテーブルに向かい合って座った。

第五章

それから。まずは千佳が口を開いた。

「それで先生」

「言いたいことはわかってるわ」

先生は覚悟を決めた顔で千佳に応えた。

「さっきのことよね」

「はい、そうです」

先生はその言葉にこくりと頷く。

「どうしてですか？また」

「ずっと前から秘密にしていたけれど」

先生はその覚悟を決めた顔でまた述べる。観念したように。

「あれが先生の趣味なのよ」

「趣味ですか」

「そうなの」

また言う。

「先生ね、普段は地味な格好をしているけれど」

「学校のあれですね」

地味なスーツ姿だ。それは千佳もよく知っていた。

「本当は。可愛い服が好きなのよ。服だけじゃなくて」

「他にもですか？」

「そう。アクセサリーとかも」

これまた意外だった。先生は少女趣味だったのだ。

「男の子もね。ちょっと」

「ちょっと？」

「気付かなかったかしら。先生結婚してるの」

「えっ!？」

この告白はこれまでになく衝撃的だった。先生が結婚していると流石に思いもしなかった。千佳はその目を思わず点にさせてしま

った。

「だから。先生旦那様がいるのよ」

「そうだったんですか!？」

「指輪もしていないし秘密にしているけれど。名前は変わっていないし」

「そういえばそうですね」

これにふと気付いた。名前が変わっていない。

「お嬢さん貰ったから」

「お嬢さん、ですか」

「先生一人娘だから。家を継がないといけないし」

古い考えだがまだある考えであった。だから先生は結婚していても他の人にはわからなかったのだ。中々面白く隠れたものであった。

「それで。お嬢さんをね」

「はあ。そうだったんですか」

「可愛い子を貰ったの」

「御主人もですか」

どうやらこの先生の少女趣味は筋金入りだと思った。夫まで可愛いと言うのはもうそれだけでかなりのものだと思われることであった。同じ少女趣味の人間として。

「大学生だけれどね。その、だから」

「年下の方なんです」

「そうなの。大学でたら先生になるの」

それも決まっているようであった。どちらにしろ子の先生が可愛がっているような人なのは確かであった。これはそのよそよしい言葉からわかる。

「その人とね」

「どんな方ですか？」

「えっ!？」

「だから。どんな方ですか？」

千佳はまた先生に尋ねるのだった。

「ここまでお話しして頂いたら。最後まで御聞きしたいので
写真ね」

先生はふと口に出した。

「主人の写真。見せて欲しいのね」

「駄目ですか？」

「いえ、いいわ」

少し意外にも先生は素直に千佳の申し出を受けたのだった。

「よかつたら。はい」

そして懐の財布から一枚の写真を出してきた。そこには楽しげに
笑う先生と童顔で小柄で可愛い男の子が映っていた。大学生にはあ
まり見えない感じだった。

「この人ですか」

「大学の三つ後輩で」

先生はそう説明する。

「一目で。その、あれで」

「好きになられたんですね」

「そうなの」

頬を赤らめさせてこくりと頷いてきた。

「主人は私の趣味を知っているけれど別に何も言わないし」

「そんなに気になります？」

「だって。当然じゃない」

顔を俯かせて千佳に述べる。

「似合わないでしょ、やつぱり」

それが先生の言い分であった。

「先生みたいな女がそんな格好」

「それは別に」

「お世辞は言わなくていいから」

「じゃあ本音言いましょうか？」

千佳はこう先生に返した。

「それだつたらいいですか？」

「ええ、いいわ」

また覚悟を決めている声になった。その声で言うのだった。

「是非。言って」

「じゃあ」

「人それぞれですよ」

にこりと笑って言う千佳であった。

「えっ!？」

「ですから。人それぞれですよ」

「お世辞!？それとも」

「だって。私も同じですし」

千佳はまたにこりと笑って言う。そこには何の照れも隠しもなかった。

「同じって。それは」

「一緒にピンクハウスの服着てますよね。ですから同じじゃないですか」

「それはそうだけれど」

しかしそれでも先生は俯いている。納得していない顔であった。

「私はそうは。思えないわ」

「じゃあ逆の立場だったとしますね」

千佳はそれを受けて今度はこう言うのだった。

「私が先生だったら。どう思われますか」

「それで私が生徒なのよね」

「はい、それだと」

「羨ましいわ」

これが先生の意見だった。見ればその目は少し羨望が入っていた。そうして千佳を見ている。彼女がピンクハウスが似合うのが羨ましいのだ。

「本音を言っけれど」

「羨ましいですか」

「ええ、似合うから」

それを正直に述べる。紅茶がいつもより苦く感じる。だがそれは有り得なかった。何故なら先生が飲んでいるのはロイヤルミルクティーだからだ。しかもそこには砂糖をこれでもかという程入れているのだ。苦い筈がないのだ。甘くはあっても。

「やっぱり」

「それで。どうしたいと思われませんか？」

「どうしたいって私が!？」

「はい」

またにこりと笑って先生に言う。

「どうされたいですか、羨ましいと思ったなら」

「やっぱり。そうなりたいわ」

これが答えであった。

「似合うように。無理かも知れないけれど」

「私もです」

そこでこう言う千佳であった。

「私もそうなりたいです。似合うように」

「けれど後藤さんは」

「先生は素敵な方ですよ」

声をつわすらせた先生に言うのだった。

「そ、そうかしら」

「背が高くて奇麗で」

これは本当のことである。千佳が本当に思っていることだし他の皆もだ。実は先生は美人で評判なのだ。色々と地味だの言われていてもだ。この評判は確かである。

第六章

「ですから」

「自信を持っていいのかしら」

「私が自信なかったら先生もそう仰いますよね」

「だって実際に後藤さん似合ってるし」

またそれを言う。

「それで自信ないなんて。言わせないわ」

「私事です。やっぱりスタイルよくて綺麗ですからいい感じですよ」

「主人もそう言ってくれるけれど」

その年下の可愛い夫である。今も写真の中でその夫の横でにこりと笑う先生がいる。

「それでも。お世辞なんだって」

「お世辞だったら二人きりですし言いません」

実は千佳はそうした女の子なのだ。だから今はっきりと本音を言っているのだ。

「安心して下さい」

「そう。それじゃあ」

「はい、一緒に楽しみませんか？」

先生が落ち着いたところでこう提案してきた。

「一緒につて？」

「ですから。ピンクハウスを」

こういうことであった。楽しむのはそれについてなのだ。

「楽しみませんか」

「それはまあ」

先生は少し考える顔をしてから千佳に述べた。視線が少し泳いでもいた。

「私も。ピンクハウスは好きだし」

「だったらいいじゃないですか。二人で」

「二人でなのね」

「はい」

そのにこりとした笑みでこくりと頷く千佳であった。

「誰にも言う必要なんてないですし」

「そうね、それは」

それは先生にもわかった。そもそも内緒の趣味だったからだ。

「それじゃあ。後藤さん」

「ええ」

「いいかしら、それで」

先生とは思えない言葉だったがそれでも言うのだった。

「二人で」

「はい、是非共」

笑顔で述べる。

「御願います」

「わかったわ。じゃあ後藤さん」

先生はここまで来てようやく笑うことができた。笑えば知的でかつ優しい笑みになっていた。その笑顔は少なくとも千佳の知らない笑顔であった。

「これから。宜しくね」

「は、はい」

千佳は先生のその笑顔に思わず息を飲んでしまった。そのせいでついつい返事が遅れてしまったのだ。先生もそれに気付いた。

「どうしたの」

「いえ、あのですね」

「ええ、どうかしたの？急に」

「やっぱり先生似合ってますよ」

先生の顔をじっと見ながらそれを述べた。

「ピンクハウスも」

「またそれは」

「いえ、今の笑顔です」

そしてその笑顔を先生自身にも言うのだった。

「今の笑顔。それがすっごくいいですから」

「笑顔、なの」

「そうです」

それをまた言う。

「その笑顔がすっごい絵になっていましたから」

「笑えばいいのね」

「そうです」

先生にそう勧める。

「そうすればピンクハウスの方から先生に合わせてくれますよ」

「ふふふ、だとしたら冥利に尽きるわ」

またその笑顔になった。気持ちがどんどん楽しくなってくるのが先生自身にもわかる。そうした気分になるのは本当に今までなかったことであつた。

「服を着る意味がもつと出て来たし」

「そうですよ、じゃあ今から」

「行く？お店に」

「はいっ」

千佳は朗らかな笑顔だった。それはそれでピンクハウスに似合っていた。

「じゃあ一緒に」

「ええ。それでね」

先生はここでまた言う。

「このお店いいでしょ」

「ええ、とても」

「商店街の人には結構有名だけれどうちの学校の生徒は知らないのよ」

「そうだったんですか」

これは意外なことだった。千佳も聞いて驚きであつた。

「それはまた」

「だから。何かあればここでね」
「はいっ」

明るく挨拶をする。そうした場所があるのならかなり都合がよかった。千佳にとっても。

「これからが楽しみになってきたわ」

「私もです」

二人は笑顔で言い合う。

「一人で楽しむよりもね」

「まずは二人で、ですよね」

「そうね。じゃあ今からまた行くのよね」

「はい、そのつもりです」

また明るく先生に言葉を返す。

「勿論一緒に、ですよね」

「御願いでできるかしら」

「先生、それは私の台詞ですよ」

また笑って言うのだった。

「だって。私が生徒なんですから」

「ふふふ。そうね、それじゃあ」

「御願います」

こうして二人は喫茶店を出てピンクハウスに向かった。先生の顔は千佳と同じ晴れやかなものになっていた。一人より二人、そして楽しむことこそが何よりも大切だとわかったからだ。迷いがなくなったその顔は今まで最も綺麗な顔になっていたのだった。

ピンクハウスでもいい 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1587d/>

ピンクハウスでもいい

2009年3月24日09時22分発行